Gallery 愛海詩 えみし

龍門司焼（鹿児島県）
川原史郎 作陶展
現代の名工
9月10日～9月29日

彩遊の号　No.35
愛海詩の会
会　　報
令和元年９月５日発行
編集発行人／ギャラリー愛海詩
佐 藤 睦 子
〒064-0821
札幌市中央区北1条西28丁目2番17号
TEL・FAX／(011)613－1112
WEBSITE
http://www.emishi-s.com
E-mail:kougei@emishi-s.com

「愛海詩」二十一周年

薄紙を重ねるように、日暮れが早くなり、季節は秋へと向かっております。植物が「赤らむ」…のアカはアキへと繋がっている、秋は豊穣の時でもあります。

ギャラリー愛海詩・愛海詩の会はこの秋、二十一周年を迎えました。愛海詩の会の会員の皆さま、長くお支え下さり、ご縁をいただいている方々に心より感謝申し上げます。人であるならば「愛海詩」無事に二十一歳の誕生日を迎えることができました。その時々の傍には、皆さまの温かい笑顔があったように思います。二十一周年のこの秋、私は一段と仕事を楽しむ、出合いを楽しむ、言の葉を大切に伝えることを楽しむ、そんな「三大楽しむ」をさせていただいている事がうれしく、有難くもあります。しかし一方では、考えなければいけない事、行動していかなければいけない事、我慢しなければいけない事も多いのですが、仕事の理念に反する我慢は砂の上に城を築くようなものであることを何度か思い知らされてもいます。そして、砂の上でダンスをしているようなふあふあして摑み所のない、おもしろければいい…という高括りの社会の傾向に憤りを感じてもいます。本当のところ、本物を知って行かなければ、人間としての力が薄くなってしまうのは明らかです。

この二十一年間、多くの作り手の心と現場、使い手の感性と励まし、様々な語りかけ、喜び、ご意見も、その各々が私の行く道を照らしてくれました。これからもギャラリー愛海詩・愛海詩の会の進む道、思いが皆さまと共に確かな胸に響くシンフォニーを奏でられますよう……。

（佐藤　睦子）

作陶する川原史郎氏

今年、二十一周年に相応しい作品展を開催できますことを嬉しく思っております。ずっとご縁ができることを願っていた窯元・龍門司焼。北海道で初めて龍門司焼の名工・川原史郎氏の作品展、開催の運びとなり誇らしく思います。

やはり、本物の威風がそこにありました。昨年の秋、かねてより胸の奥にあった龍門司焼の窯元を突然訪れました。最初、歯切れの良い、素敵な奥様と話しをし、その後十五分ほどして、川原氏がいらして下さり、三人で今回の作品展に向けての話し合いが進みました。その間、窯元のぐるりを見せていただき、土作り・釉薬作り・成形・窯焚き、そういった一連の仕事に偽りがなく、今では数少なくなった、本物の職人の仕事振りが手に取るように解るのには、そんなに時間はかかりませんでした。「北海道は良いところ…」とおっしゃって下さった川原氏ご夫妻。その北の街の人々に一人でも多くこの本物の焼き物・龍門司焼を手にとって見ていただきたい。茶道具、花瓶、皿、鉢など約五十点を展示します。ぜひともご高覧下さい。

龍 門 司 焼 の 歴 史

十六世紀末に薩摩藩主　島津義弘公が、朝鮮陶工を伴ってきて始められた薩摩焼。龍門司焼は、渡来陶工・芳珍の孫　山元碗右衛門が桜島を南に臨む加治木の山懐で良質な原料を発見し、一六八八年、窯が築かれ、以来三百年余りの歴史を守り続けています。

陶祖山元碗右衛門をはじめ、川原芳工、芳寿、芳平、芳光、芳次等多数の名工の遺風は、尊い伝統として今日まで生き続けています。

戦後、昭和二十三年に協同組合を設立し、昭和二十五年に現在の龍門司焼企業組合となり、江戸時代からの伝統技法を引き継いできた陶工達が結集し、新たな龍門司焼作りが始まりました。

昭和三十九年に龍門司焼の三彩が県の無形文化財に指定され、技術保持者として川原軍次が指定を受け、ここを終生の仕事場としました。

今なお、先人陶工達の苦労と努力、研鑽によって伝統は守られ、二〇一六年、理事長川原史郎は「現代の名工」に認定されました。

作品には渋い飴釉、黒釉、あざやかな色調の三彩、珍しい鮫肌や蛇蝎釉、そして黒釉に青流し、玉流し等の多種多様な天然釉が施され、素朴ながらも優美な品格を持つ逸品です。

粘土や釉薬の原材料を地元で採取し精製、調合して、登窯での焼成は時代を越えていく作品でもあります。

「黒釉玉流花瓶」（高さ43cm×巾27cm）

圧巻の作品の１つで、観る者をクギ付けにします。しっとりとした黒釉のボディに玉（ギョク）のような美しい釉薬が流れ、その流れの止まりも神々しく、神を味方につけたような仕事ぶりです。

陶　歴

1949年　鹿児島県加治木町に生まれる
1971年　陶芸を志す
1972年　伊勢市神楽の窯奥田康博に師事
1975年　龍門司焼企業組合にて作陶
1976年　日本民芸館展に入選（以後連続入選）
1983年　日本民芸館展　奨励賞
1985年　日本陶芸展　入選
1985年　日本民芸公募展　優秀賞
1988年　国際陶芸展　入選
1991年　薩摩焼フェスタ 鹿児島県市長会会長賞
1992年　日本民芸館展　日本民芸協会賞
1993年　日本陶芸展　入選
1994年　西日本陶芸展　入選
1997年　奥田康博師弟展に出展
1998年　池袋　東武百貨店　大薩摩焼展に出展
2003年　山形屋百貨店にて龍門司焼展
2006年　伝統工芸士認定
2008年　鹿児島県知事優秀技能者表彰
2009年　経済産業大臣伝統工芸功労者表彰
2016年　山形屋百貨店にて龍門司焼三人展
2016年　現代の名工受賞

お誘い

９月21日（土）午前10時から午前11時30分まで、主に龍門司焼のお話しと工芸品、文化について語り合います。どなたでも参加できる楽しい会です。

場所はギャラリー愛海詩２Ｆ。参加費は1500円（お土産付）。講師はギャラリー愛海詩主宰・佐藤睦子。先着８名様です。ギャラリー愛海詩へご予約下さい。

「ご挨拶～作陶展によせて～」

龍門司焼・川原　史郎

魅力あふれる北海道の地で初めての「龍門司焼・川原史郎作陶展」を開催できることは大変嬉しく、また光栄に思います。この展示会について御尽力いただいたギャラリー愛海詩様には心より感謝し、御礼申し上げます。

さて、薩摩焼の古窯「龍門司焼」は朝鮮半島からの渡来陶工の三世・山元碗右衛門が、鹿児島県加治木町の山中で良質の原料を発見し、一六八八年に開窯したとされています。山元碗右衛門に、私の祖先を含め地元の九名が加わり、その後、約三三〇年に渡り今日まで火を絶やすことなく続けてきました。現在でも四ｋｍ以内からほとんどの原料を採り、精製、調合し登り窯で焼き上げています。釉薬の種類の多さと技法の豊富さが特徴で、鮫肌釉・蛇蝎釉・白蛇蝎釉は日本でも龍門司焼、唯一のものです。

私は焼物作りになりまもなく五十年経とうとしています。二十一歳で伊勢市・神楽窯の奥田康博氏に師事し三年余を過ごしました。師匠は濱田庄司窯の研究生となり、丹波焼の近代化の命をうけ、河井寛次郎師に指導を受けた人物です。私はそこで技術はもちろん、焼物に対する姿勢など大変厳しく学びました。

修行後、龍門司焼で仕事を始めた当初は、粘土の違いなどに戸惑ったものの、次第に新しい技法を積極的に取り入れ、龍門司焼の作風も大きく変貌することとなりました。私は先代たちが継いだこれまでの龍門司焼の復元だけでなく、現代の生活にあう作風を取り入れることで、いまの時代の器を作ることを信念としています。

鹿児島の黒薩摩焼をこの会期に是非、ご高覧下さいますようにお願い申し上げます。

「三彩釉花瓶」（高さ31cm×巾24cm）

花瓶の肌合いも三彩の釉もこんなに美しい釉には、なかなか出合えません。自然からいただいた恩寵を写しとったような作品です。重なり合った釉薬の色調から和みの調べが聞こえてきそうです。

「鮫肌釉花瓶」（高さ31cm×巾17cm）

龍門司焼の真骨頂と言える鮫肌釉。長い歴史の中で創り出された逸品です。光の中で、お天気によってもまるで生きているように表情が変化し、その時々の美しさを見せてくれます。

「三島象（ぞうがん）嵌花瓶」（高さ37cm×巾13.5cm）

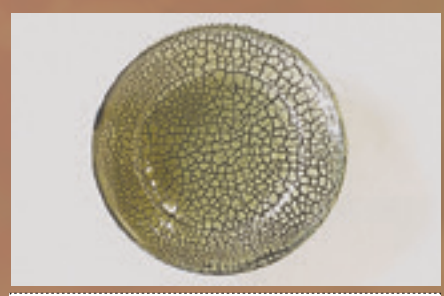
乱れのない象嵌に卓越された技を感じます。素朴だけれど華やかさもあり、落ちついているのだけれど躍動感もある。活けた花を活かしてくれる存在感があります。

「黒釉玉流し茶盌」（高さ8.5cm×口径14.5cm）

自然と呼応しあう、長く使い込むほどに時代を味方につける茶盌。玉流しの釉の止まりが見事です。抹茶の緑色も美しく映え、自然からのギフト、限りない心をいただく盌です。

「鮫肌釉茶盌」（高さ８cm×口径14cm）

全てを包括する漆黒の宙の中へ誘われる一瞬が抹茶をいただく時に感じられそうです。それは美しい鮫肌釉、黒が持つ力…と言えます。一期一会の時を際立たせてくれる、静かなしかも深淵な盌です。


「蛇蝎釉皿」（高さ5.5cm×巾32cm）

思わず息をのむほどの存在感は自分の内から出て来る感性と呼応するようです。本物が持つオーラは人達の会話も弾ませます。力強く迷いのない作品です。

「黒釉玉流し鉢」（高さ18.5cm×巾28cm）

楽しく多様に使える鉢です。アイディアのひき出しを遊び心と共に満たしてくれる鉢。しっとりとした黒釉に美しい玉流しの釉がその多様性を懐深くひき受けてくれます。

お知らせ

毎週木曜日、午前11時から約１時間（日曜午前11時から再放送）ギャラリー愛海詩、佐藤がＦＭラジオカロス札幌78.1Mhzで生放送させていただいております。生活を豊かに彩る、文化や知恵の大切さをお伝えします。